

ズミュニケーション

2007・1月号

OMORIYAMA
ZOO NEWS
大森山

No.74



秋田市大森山動物園
Akita Omoriyama Zoo

画：佐藤一男

ホット インフォメーション

HOT INFORMATION

カンガルー の赤ちゃん 誕生

昨年10月23日初めてお母さんのお腹から顔を出したカンガルーの赤ちゃん。その後いつ顔を出すかとヤキモキさせていたが、最近は袋から頻繁に顔を出すようになってきた。袋からちょこんと出た顔が愛くるしい。冬期間は寒さのためカンガルーを外に出すことは少ないので、見ることができたら超ラッキー！



ゼニタナゴ の繁殖池

昨年10月14日、塩曳渕に生息する希少淡水魚ゼニタナゴの保全を目指し、ひょうたん橋すぐ脇に繁殖池が完成した。ボランティアと共に造った池の中には塩曳渕から採取したゼニタナゴとドブガイを入れた。今年の春には無事稚魚の誕生なるか！



さよなら 感謝祭

平成18年の開園期間中、最後の日曜日となった11月26日、お客様と動物に対する感謝の気持ちをこめて「2006さよなら感謝祭」を開催。天候にも恵まれ、園内は様々なイベントで終始たくさんのお客様で賑わった。昨年の入園者は3月18日の開園から11月30日まで240,642人と前年より5,000人多く、今年は更なる入園者数の増加を望みたい。



アライグマの じゃぶじゃぶ テラス完成！

名前の由来でもある食べ物を洗う仕草、そんな姿を見てもらおうと新たに「じゃぶじゃぶテラス」を設置した。飼育員からエサをもらうといそいそテラスに



行き、エサを水で洗ってから食べ始め、無くなるとまた飼育員にエサのおねだりも。冬期開園中でも「アライグマのまんまとイム」で見られるよ！

ヨーロッパ フラミンゴ 来園

新たに多摩動物公園からやって来たヨーロッパフラミンゴ10羽。現在は入院棟で越冬中。園内にも既に13羽のヨーロッパフラミンゴが居るが、いずれも高齢のため繁殖できずにいる。若い個体が入り繁殖が期待される。



ニホンザル の入れ墨

個体識別と健康チェックのため、平成17・18年に産まれた15頭の子猿に入れ墨をして体重測定を行った。暴れる子猿を押さえ、内股と顔に入れ墨をして解放。今回はサルに噛まれる職員もなく無事終了した。

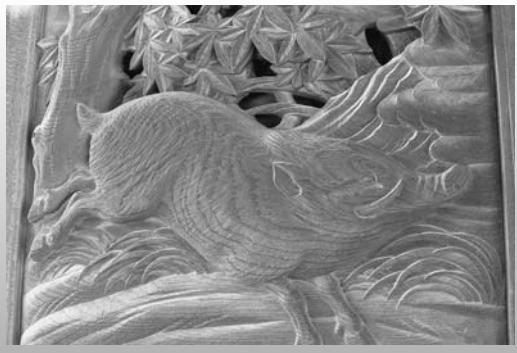


計 報



レッサー・パンダ「風」死亡

平成16年に産まれたオスのレッサー・パンダ「風」が寝室で事故のため死亡しました。何かの弾みで寝台に付いている階段と壁の間に頭を挟んでしまったようです。「風」は大森山動物園で初めて繁殖したレッサー・パンダで、これからを期待していただけに誠に残念でなりません。



干支の話

— 猪 考 —

大森山動物園長
小松 守

今年の干支は「亥」、音読みは「がい」、十二支の最後である。十二支には動物を当てているが、それに「猪」(イノシシ)が登場するのは、人と猪のつきあいが長い証でもある。

「猪」は「けものへん」に「者」と書く。「者」の字は藤堂明保氏の漢字の話(朝日選書)によると、「…すなわち火を集中するという意味の「煮」の元になる字であり、集中していっぱい詰めるという意味をもっている。人間が集中する場所は「都」となり、日がたくさん集まれば「暑く」なる。「猪」の字は「けもの」すなわち、動物がたくさんいることで、言い換えれば肉がたくさん集中し詰まっている様子を表している。「シシ」は獣肉を意味するが、「イノシシ」は、正に肉のかたまりを名にした動物と言える。猪は家畜化され豚となり、人間の豊かな食生活を保障してくれた大事な動物である。

一方、猪は荒々しく勇猛なイメージであり、よく「野武士」にたとえられる。また、猪と聞いて誰もが「猪突猛進」という言葉を思い浮かべる。重量感あふれる堅固な体躯の猪がなりふり構わず一気に突っ込んでくる様を指す。ところが、猪は必ずしもイメージするような荒くれものでも、無鉄砲な動物でもない。

以前、大森山動物園で猪を飼育していた。飼育場所が狭いため飼育員と猪の間で摩擦が起きそうになることもしばしば。飼育員が猪の領域に踏みこむと、当然、猪は自分を守ろうと攻撃的になるのである。しかし、人との間に一定の距離保とうとする猪の立場を考えた飼育員は、相手との間合いを読み取り、気遣うことで、猪の攻撃を抑えることができたのであった。猛々しく猪突猛進がトレードマークの猪も、接し方によっては健全な動物になるし、こちら側の心を察し応えてくれる賢い動物もある。こうした関係は何も猪に限ったことではなく動物一般に通じるものと思う。生き物は本来、無益に争うことはしない。それは自分を大事することの裏返しでもある。また、動物は人といい関係になれば親和的な態度をかえしてくれるものである。

飛躍した展開になるが、トラブルを避けながら相手を尊重し気遣いながら猪を上手に飼育した話は私たちの人づきあい、人間関係に大事なものを教えているような気がする。高度でスピード化したIT情報が溢れる現代社会では、無機的な電子情報でのコミュニケーションに偏りがちとなり、動物が自然に編み出した、目と目を合わせ、向き合い、互いを尊重した心を通わせた会話が少なくなっている気がする。相手を気遣い呼吸を合わせた心のやり取り、果たしてどれだけできているだろうか。例えば「いじめ」が社会問題化しているが、このことは子供同士、相手を思い気遣う心が希薄になっているのではないだろうか。その原因の一つは大人社会で起きていく不寛容さにある気がする。子どもは大人を想像以上に観察し、敏感に感じ取り稚拙な手段として「いじめ」行動で模倣しているのかもしれない。

猪年の今年、目標に向かいスピード感をもった猪突猛進もいいが、時には立ち止まり、人づきあいについて一度じっくりと見つめ直すことも必要ではないだろうか。

特集

未来の大森山動物園、夢翔る

大森山動物園長 小松 守



▲上空から見た大森山公園と動物園（下半分）

楽しい場であるために、 そしてテーマは

それでは、人は動物園の何に魅力を感じるのか。ヒントは来園者が教えてくれている。

来園者が足を止め、たくさん集まるところは魅力の一つに違いない。動物が、生き生きと動き、エサを食べ、より近くで、そして触れ合うことができたらきっとわくわくするだろう。飼育者との会話が楽しめればなお嬉しいだろう。スタッフのサービスと、動物との一体感がポイントになるのかもしれない。映像の世界がこれほど発達した時代にあっても、本物の命とのふれあいは人を魅了し続けるはずである。大森山動物園のテーマは「命とのふれあい」である。ただし、限られた財源で動物園の魅力をどうつくるのか。そこが悩ましいところである。

はじめに

大森山動物園は市の南西部にある大森山公園の中にある。大森山の山頂からの眺望は素晴らしく秋田市街が一望できるほか、日本海や男鹿半島、さらには鳥海山まで眺めることが出来る観光スポットでもある。140種約650頭の動物を飼育展示し、日本を代表する猛禽イヌワシの繁殖のほか、園内には希少淡水魚ゼニタナゴの生息する沼があるなど、自然環境に恵まれた動物園である。秋田市や県内外からたくさん的人が訪れるこの場所をもっともっと魅力的に発展させ、秋田から全国に情報発信できる動物園にできないものか、年の初めにあたり、夢の大森山動物園将来像を描いてみた。

何のための動物園か

夢は荒唐無稽なものではなく、やはり実現させたいものである。夢を描くためにも大森山動物園の存在意義を明確にしておくべきであろう。幸い06年1月には秋田市大森山動物園条例が施行された。設置理念に「豊かな自然の中、人々に楽しい動物との出会いの場を提供し、命を学び、つなぐ場」と謳われている。動物が命をつなぎ、けんめいに生きる姿、きらきら輝く命を感じとってもらうこと、今の時代もこれからも大切にしたいものである。

また、たくさんの人が集う動物園は、秋田の情報発信とともに、観光拠点の一つとして賑わいづくりを進めることで地域経済の活性化へのお手伝い也可能かもしれない。

動物園が如何に高い理想を掲げ、命の教育、体験学習、環境保全など具体な企画を展開しようとも、訪れる入園者がたくさんいなければ、企画は実効あるものにはならない。動物園を楽しく魅力的な場にしたい。

テーマの演出 ◆その1

●大森山公園と融合させた 新スタイルの動物園をめざして

大森山動物園は豊かな自然と森に包まれていることが最大の特徴かもしれない。その自然を活かさない手はないし、自然豊かな秋田を全国に向け情報発信したい。ただし、自然豊かといつても具体的な動物が登場しないと意図が伝わりづらい。

自然の中に潜ませた動物、例えばリスやフクロウなどと森の中で出会うことにより「命とのふれあい」を演出できないだろうか。現在の動物園を南に拡大、大森山の森に動物園を入り込ませる、そんな大胆な発想を展開してみたい。トレッキング感覚で森を歩き自然と命を体感できるゾーンにするのである。ネーミング、「ミルヴェ いのちの森」はどうだろう。演出効果をあげるために、まず秋田の自然を特徴づけるブナの森を再現したい。既存の秋田杉と組み合わせ、そこには特に秋田にこだわった動物のすみかを再現する。内気な性格の秋田産動物の展示には、動物たちのトレーニングは不可欠である。鷹匠技術を活かしイヌワシが人々の眼前で飛ぶなんていかにも感動的だろう。名付けてイヌワシの谷構想。

自然体感ゾーンの実現には動物の確保と高い飼育技術が必要であり、実現すれば大森山動物園の飼育技術が飛躍的に高まること間違いない。困難へのチャレンジは、ステップアップのチャンスでもある。



▲飛べ フクロウ

テーマの演出 ◆その2

●輝く命のパフォーマンス エキゾチックゾーン

一方、今ある動物園の新たな展開も忘れてはいけない。母屋なのである。このゾーンは外国産動物を中心としたエキゾチックゾーンとして再整備する。適当な起伏は魅力の一つ、何よりもたくさんのスターたちがすでに待機している。「ミルヴェ いのちの森」と対比させ、「輝く命のパフォーマンスゾーン」と名付けよう。エンターティメント性の高い、命がき

らきらと輝く演出で盛り上げてみたいものである。例えば、秋田の寒い季節でも、ミルヴェに行くべ(秋田弁で行こうよ)と言えるような熱帯動物が棲む「ミルヴェ熱帯館」ができたら、という声が聞こえそう。

また、よりダイナミックな動きを演出するため、アシカのプールを現在の10倍くらいに拡大、群れが遊泳する水槽を底と天空から見ることができたら感動ものである。さらには、ポニー乗馬などふれあい体験も楽しさの演出に欠かせないサービスかもしれない。そばには秋田市立美術工芸短期大学もある。動物とアートとのコラボレーションもあったら話題性を呼びそうだ。

しかし、エンターティメント性の高い動物園に必要なものがもう一つある。それは、ハート(飼育哲学)を伝える伝道人。そしてゲートにズーコンシェルジュがいたら親切でやさしい動物園になるだろう。「命とのふれあい」は「人とのふれあい」でもある。

テーマの演出 ◆その3

●公園を総合的に活かす

「ぐるっとズー」構想

動物園にひきつけるための要素として、やはり多様な魅力を組み込むことが必要であり、そのことで動物園への厚みがつくし、互いに補完しあい相乗的な効果を生み出すはずである。そんな環境づくりも忘れてはならない。

山頂の展望台、広い芝生のピクニック広場の活用、おしゃれなレストランやショップ、全天候型の人をゆったりと包み込んでくれるレストハウス、動物園とそれらが有機的につなぐ「ぐるっとズー」構想である。回遊性の創出であり、移動手段として「ぐるっと馬車」の運行などなど、夢はつきない。

大森山動物園・公園には、秋田らしさを活かしながら、人々が一日過ごせる場として、観る、体験する、遊ぶ、くつろぐ、食べる、こうした多様な魅力を集積させたいものである。夢はまだ広がりそうである。亥年にあたり猪突猛進と行きたいところだが、まずはじっくりと腰を据え、手づくり感あふれる夢を絵に描いてみたいものである。夢を実現には市民の理解と応援は欠かせない。



▲トラのハンティングシーン

飼育日誌

(06.10.2~)

- 10月2日 ♀/♂ ノドジロオマキザル「'06生まれ」尾が半分切断していた。傷口を母親がしきりになめている。
- 10月4日 ☀ ライオン♂「ミミ」後肢が若干ふらついているが、採食良好で元気になってきた。
- 10月8日 ♂/♀ アシカ、偏食が激しく一時中断していた「アシカのエサやり体験」本日より再開。
- 10月10日 ☀ アフリカゾウ♀「花子」鼻先が約10cm欠損していた。化膿防止のため患部を消毒し、抗生素を餌に混ぜて様子を観察。
- 10月12日 ☀ ハワイガヌ♀衰弱死。
- 10月14日 ☀ カピバラ♀「ハタ」展示場で倒れていた。保温し治療を行う。
- 10月15日 ☀ インコ、カンガルー、エミュー寒さ対策のため保温ランプを点灯。
- 10月15日 ☀ カピバラ♀「ハタ」急性血液循環不全のため死亡。
- 10月16日 ☀ チンパンジー♀「ジェーン」と♂「ボンタ」との間に赤ちゃん誕生。
- 10月16日 ☀ ライオン♂「ミミ」兄妹と同居。お互い威嚇行動が見られたが、午後には仲良く3頭一緒にじゃれ合っていた。
- 10月19日 ☀ ラクダ♀「田田」右前肢の爪がはがれる。
- 10月20日 ☀ インドホシガメ♀膀胱結石のため死亡。
- 10月23日 ♀/♂ カンガルー「赤ちゃん」一瞬だけお母さんのお腹の袋から顔を出していた。
- ノドジロオマキザル「仔」尾を切断され(3回目)元気がなかったため入院治療。
- 10月24日 ♂ 昨日入院したノドジロオマキザル「仔」死亡を確認。
- 10月26日 ♀/♂ シュバシコウ♀「右赤・左白」野生動物による食害で死亡。
- 10月27日 ♀ チンパンジー♀「ジェーンの赤ちゃん」衰弱死。
- アフリカゾウ♀「花子」が消毒用のイソジンを嫌うようになってきた。
- 10月29日 ♀ オオカミ♀「ハチ」左前肢に怪我、麻酔をかけ傷口の縫合を行う。

- 11月6日 ♀/♂ レッサーパンダ♂「風」今朝、寝室内で死亡しているのを発見。
- 11月9日 ☀ イヌワシ展示個体、体重測定実施。('06生まれのヒナ性別鑑定のため採血実施: 検査結果♀1、♂2)
- 11月10日 ♀ チンパンジー♂「J太郎」同居中に♂「ユミノスケ」から攻撃を受け右腕を負傷する。麻酔下による治療。
- 11月19日 ☀ ゾウ交尾確認。
- 11月21日 ♂/♀ コウノトリ体重測定および採血。♂5.5kg、♀4.10kg
- 11月22日 ♂/♀ ツキノワグマ♂「稔」動きが鈍くなってきた。
- 11月23日 ♀ ヨーロッパフラミング多摩動物公園より10羽搬入。
- 11月26日 ☀ アフリカタテガミヤマアラシ繁殖、その後食害のため死亡。さよなら感謝祭開催。
- 11月30日 ♀ マーコール削蹄実施。
- 12月1日 ♂ F.ケージの鳥類、越冬舎へ移動。
- 12月3日 ☀ チンパンジー♂「J太郎」体重測定6.64kg
- 12月4日 ♀ ツキノワグマ♂「稔」冬ごもり準備のため、本日より給餌量を減らす。
- 12月5日 ♂ トキ舎、冬囲い作業。
- 12月10日 ♀/♂ サル山、入れ墨作業準備のため絶食開始。チンパンジー♂「J太郎」腕の包帯を外し消毒を中止する。
- 12月11日 ☀ ツキノワグマ♂「稔」冬ごもりに入ったようだが、人の気配で反応がみられる。
- 12月12日 ♂ ニホンザル'05'06生まれの15頭対象に入れ墨作業実施。
- 12月14日 ♂ ツキノワグマ、冬ごもりの様子をモニタードするため♂「稔」の部屋にカメラ設置作業。
- ペンギン1卵目のヒナ孵化確認。
- コモンマー毛セット2頭出産。
- 12月15日 ☀ ペンギン2卵目のヒナ孵化確認。
- カンガルー「赤ちゃん」初めて完全に袋の外に出たのを確認する。
- 12月16日 ♂ クロヅル、マナヅル越冬のため移動。
- 12月19日 ♂ ハクビシン♀「老」乳腺癌のため死亡。
- 12月20日 ☀ ミニブタ♂「トン平」、「トン吉」2頭搬入。

2006 飼育動物数 (平成18年11月末現在)

哺乳類	61種類	339点
鳥類	60種類	253点
爬虫類	14種類	36点
両生類	2種類	5点
魚類	4種類	24点
合計	141種類	657点

編集後記

11月末で通常の開園期間が終り、12月は閉園期間でしたが、動物園職員は遊んでいた訳ではありません。展示場の冬囲い作業や寒さに弱い動物を越冬舎に移すなど冬の準備に追われていました。そんなこんなで本格的な冬の到来です。寒さの苦手な私にとっては辛い季節です…でも厳しい寒さの中だからこそ見られる動物たちの姿があります。冬期間園もみなさまのお越しをお待ちしています！

安永 千秋

飼育レポート①

「花子さんの怪我」

飼育展示担当

西 方 理

10月9日朝、アフリカゾウの花子(メス、推定17歳)の鼻先が10cm程無くなっているのを発見した。はっきりとした原因はわからなかったが、夜間、自分でチェーンに鼻を絡めて抜けなくなり、無理やり引き抜いたためちぎれたのではないかと思われた。

アフリカゾウは、鼻先の上下にある突起で物をつかむことができ、これにより鼻先を開閉して鼻で吸い込んだ水をこぼさずに飲むこともできる。この突起が完全になくなってしまったため、餌を食べたり水を飲んだりすることができなくなる心配があった。

私たち飼育担当者は数日間、つきっきりで様子を見守った。心配をよそに、花子の様子は普段とあまり変わらなかった。ケガをしたその日から鼻で巻くようにして餌をつかんで食べ、水をこぼしながらも飲むことができた。そのため、花子がケガをしたことを知らない来園者が異常に気づくことはなかったし、外見では

日常生活に支障がないように思われた。

しかし、私たちが

もっとも心配したのは傷口が化膿することだった。傷口を消毒しようとしても花子はじっとしていてくれず、うまくいかなかった。好物のリンゴに薬を埋め込んで食べさせようとしたが、吐き出してしまう。薬の苦さが嫌なのかと思い、リンゴ1個あたりに入れる薬の量を少なくする工夫をしたところ、吐き出さずになんとか食べてくれた。薬を毎日飲ませるのは根気が要る仕事だった。幸いにも傷口が化膿することはなかった。

花子は今ではケガをする以前と変わらない様子で生活しているが、人間にたとえるなら手の指先を失うような大ケガであった。それでも痛がる素振りや弱みを見せなかつた花子に、陸上最大の野生動物であるアフリカゾウの威厳を感じた。



飼育レポート②

「チンパンジーのJ太郎」

飼育展示担当

堀籠 麻子



J太郎は人間によって育てられたチンパンジーである。彼の産みの母であるジェーンは高齢のため母乳がほとんど出なかつた。

生まれた当初は衰弱して痩せ細り、体重は1kg弱しかなかつたが、いまでは7kgを超えるまでに成長した。私たち飼育担当者の手を離れて、チンパンジーとしての生活を送るために、チンパンジーの群に入るという新たな段階にいま來ている。

しかし大きくなつたとはいえ、本来ならばまだ母親にしがみついて甘えている時期である。そのため、継母候補として私たちが選んだのは、性格が温厚なノリコであった。

J太郎とノリコの柵越しのお見合いを繰り返し、ひとつの部屋で同居させることに成功した。最初は近づこうとしなかつた2頭であるが、日を追うごとに少しづつ2頭の距離は小さくなつた。つぎは雄のユミノスケと2頭を同居させることになった。

J太郎とノリコが居る部屋にユミノスケを入れたと

ころ、J太郎の姿を目にしたとたんにユミノスケは興奮状態となり、J太郎をつかんで振り回し、腕に噛みついた。私たちの命令も、ノリコの制止も構わずに、ユミノスケはJ太郎を振り回し続けた。吹矢で麻酔薬を投与してユミノスケを眠らせ、やつとのことでJ太郎から引き離した時は、もうだめだと思った。しかし、J太郎は生きていた。右腕に大きなケガを負つたものの、命に別状はなかつた。

いま、J太郎のケガは順調に回復している。しかし、心の傷は癒えていないかもしれない。

私たちもJ太郎も、あんな怖い思いは二度としない。しかし怖いから、J太郎がかわいそうだからといって、J太郎のチンパンジーとしての将来を奪つていい訳ではない。

同じ失敗は繰り返せないが、J太郎が群の中でチンパンジーらしく暮らせる日が1日でも早く来るよう、慎重に同居作業を進めて行きたい。

かたばた通信

【2006大森山動物園フォトコンテスト】

平成18年3月18日から9月30日までに募集していたフォトコンテストの受賞作品が決定いたしました。53点(25人)の中から7作品が受賞されました。



最優秀賞

「ouch!」 由利本荘市 小林 伸士さん

ライオンの赤ちゃんたちがじゃれ合っている瞬間をうまくとらえた写真です。顔に手があたり顔の片側だけが変形し幼い表情と相まって、とてもやんちゃでかわいらしい写真となりました。今の人間の子どもたちが失いかけている大切なものを気付かせてくれるようです。



園長賞

「波紋」 東京都大田区 田口 新さん

水を飲んでいるオオカミや水面に光があたり、神秘的な写真となりました。水面の光があたかも命の輝きを表しているかのようです。はたしてオオカミは自我を認識しているのでしょうか。

(写真展「写真でつづるこの一年」)

飼育担当者が動物たちを撮影し「写真展」を資料館で行いました。来園者から投票していただき、この2点が最も投票数を集めました。



「臨場感」

飼育展示担当
柴田典弘

夏の中央アジア高地。岩山で休息していたユキヒョウを至近距離から撮影したイメージ。展示場の魅力を伝えるためのイメージ写真として使用すれば効果的か。



「全員集合!!!」 飼育展示担当 小松 泰子

寝室の掃除が終わり、ホッと一息つくと、チクチクと私に突き刺さる視線が…そう、その正体はボニーの(右から)クリン♂、セレナ♀、マーブル♀の3頭でした。毎日こうして「ねえねえ、何してんのー」と言わんばかりに熱い視線を送ってくる3頭。並ぶ時は決まってこの順という、へんな3頭です。

お知らせ

雪の動物園開園中

今年も1、2月の土日、祝日(正月3が日を除く)に冬期開園を行っています。雪の中で生活する動物たちの様子をぜひご覧ください。

今年の開園は 1月6、7、8、13、14、20、21、27、28日
2月3、4、10、11、12、17、18、24、25日
となっております。

開園時間 11:00~14:00 (入園は13:30まで)

春の開園は3月17日(土)からです。



雪上のアムールトラ